

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16803

研究課題名（和文）作者性の諸相 中世ドイツ英雄叙事詩における歴史性と虚構性の問題

研究課題名（英文）Aspects of authorship, historicity, and fictionality of the medieval German heroic epics

研究代表者

山本 潤 (Yamamoto, Jun)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：50613098

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：口誦の英雄譚の持つ歴史性は、文化的記憶との直接的接続を通して保証されており、その作者性は伝承の伝統そのものに帰せられた。しかし中世盛期に英雄伝承を素材として書記的に詩作されたドイツ英雄叙事詩は救済史ないしは帝国史的歴史構造に関連付けられ、その歴史性を保証する根拠およびその作者性は、聖書や特定の聖職者を通し神に求められるようになる。中世後期に印刷され人気を博した「英雄本」所収の英雄叙事詩は、登場人物の名前やそれに連関する地名といった歴史の断片を内包しつつも、物語自体には特定の歴史構造の一部としての歴史性はもはや認められず、虚構へと接近している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、2010年代のドイツ中世研究において主要な論点の一つとなっている、英雄叙事詩の有する歴史性に関する認識の再検討の文脈で行われたものであり、ドイツ語圏における同主題に関する研究に参画する契機となる可能性を持つものである。また、テキストの作者性という視点の導入を通じ、書記化を契機に変容してゆく英雄詩の歴史性/虚構性の諸相の解明を目指すというアプローチは、複数の研究主題を有機的に統合するものであり、中世英雄叙事詩研究に新たな視座を提供する。本研究ではドイツ語圏の研究者との緊密な意見交換および共同ワークショップを開催しており、国際的な共同研究の基盤構築に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：The historicity of oral heroic tales is guaranteed through their direct connection with cultural memory and their attributed traditional authorship. In contrast, written medieval heroic epics are associated with the construction of the history of salvation and/or the history of the Roman Empire. The authorship of these epics was attributed via the Bible or through certain clergy claiming to represent God. Their historicity was assured in the same way. The late medieval heroic epics, which are anonymous, have been included in the printed anthological “Heldenbuecher” and still contain the fragments of history, such as the names of the heroes and the places associated with them. However, they no longer retain historicity as part of a particular historical construction and approach fiction.

研究分野：ドイツ中世英雄叙事詩

キーワード：ドイツ中世文学 歴史性 虚構性 英雄叙事詩 作者性 独文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は平成 24 年度から 26 年度に助成を受けた若手研究(B)「メディアの転換と記憶の変容 中世英雄叙事文学を対象に」を通して得られた成果に基づき、そこで明らかとなったさらなる研究課題に関しての考察を深化させてゆくという性格を持つ。以下に本研究課題の開始時点における研究対象に関するこれまでの知見および先行研究の状況を述べる。

過去の歴史的事象や人物の事績が、「文字化以前の、物語の構図やモチーフによる素材の形成」という、「第一段階の文学化」を経ることにより生み出された口誦の英雄詩は、声の文化の領域のうちであり、文字の読み書きの技能を有しない世俗貴族階級にとって、過去の偉大な王や戦士たちについての記憶を伝える、歴史伝承と見なされていたとの見解は、長らく中世学における共通認識である。そこに語られているのは、今日の歴史学的な意味での「事実」とは異なるが、受容者にとっての「真実」、共同体構成員の共有する文化的記憶であり、ゆえにそこで語られるテキストは個的な作者とは結び付けられる性質のものではなかった。そうした英雄伝承は広く人口に膾炙していたが、受容に際して常に受容者の記憶による補完を必要とする、開かれたテキストとしての性質を持っており、共同体の過去に関する記憶は、歴史の「断片」としての個々の英雄詩から遡行的に構築される歴史の「全体」としての意味を持つとみなし得る。

そのような歴史伝承メディアとしての英雄伝承は、ドイツ語圏においては 12 世紀後半以降の文字文化の広まりを背景としてさらなる「第二段階目の文学化」の対象となり、英雄叙事詩として書記作品化された。その嚆矢であるのと同時に最大の作品が、『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』(以下『哀歌』と呼称)の構築する複合叙事詩である。さらに 13 世紀半ばまでには、ニーベルンゲン素材と並んで広大な伝説圏を形成していた英雄ディートリヒ・フォン・ベルンに関する伝承が書記作品化され、一連のディートリヒ叙事詩が成立した。従来のドイツ中世研究では、中世盛期から後期の書記性の基盤の上に立つ英雄叙事詩にも、口伝される英雄詩と同様の歴史性を認めていたが、この認識には近年疑義が呈されている。

メディアの移行に伴う文化的記憶の変容の様相は、前述の平成 24 年度から 26 年度までに助成を受けた若手研究(B)での主たる研究課題であった。その研究結果として、『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』の構築するニーベルンゲン複合叙事詩、そして歴史的ディートリヒ叙事詩に属する『ディートリヒの逃亡』において興味深い知見が得られた。前者では、『哀歌』のエピローグにおいて、すべてのニーベルンゲン素材の源泉にラテン語による書記記録が仮構されるが、その架空のテキストが教会組織/書記機関の権威者であり、実在したパッサウ司教ピルグリムの命により制作されたことが語られる。これにより、ニーベルンゲン素材、すなわち受容者にとっての文化的記憶が彼の「作者性」の影響下に組み込まれており、ニーベルンゲン複合叙事詩の制作依頼者と見なされているパッサウの司教およびその教会が、共同体の文化的帰属先としての立ち位置を獲得することに繋がっていることが明らかとなった。また、史実上の東ゴート王国のテオドリック大王の事績から生まれたディートリヒ伝説を素材とし、13 世紀半ばに詩作された『ディートリヒの逃亡』に関しての研究では、作品冒頭に置かれ、物語の主人公であるディートリヒに至るまでの先祖 7 代の物語を語る通称「系譜的前史」を読み解き、ディートリヒ伝説をローマ帝国の歴史構造の中に組み込む試みがなされていることを明らかにした。その一方で、作中の当世批判のエクスクルスに関してのみ作者性を主張する格言詩人的な語り手であるハインリヒ・デア・フォゲレーレなる「個人」が登場し、英雄ディートリヒに関する物語が作品成立時の受容者が身を置く現実の予型として語られているとの解釈を行った。

これらの例に見られるように、書記作品化による変容とともに、英雄詩の伝える文化的記憶は、それまで排除されていたと思われる創作主としての個人、すなわち広義の「作者」と呼べる存在の作者性の影響下に入ったと考えられる。そしてこれらの作者性は、そこで語られる英雄詩の内容を、それまでとは異なる歴史構造、時には虚構へ導いたものと推測される。

2. 研究の目的

現在広く受け入れられているのは、英雄叙事詩は英雄伝承と同様に開かれたテキストとしての特性を保ち、また民族大移動期という英雄時代に実際に起こった事象へと遡行するという点において歴史的事象であるものの、狭義の文化的記憶ではもはやない、すなわち、英雄叙事詩は英雄伝承の単なる「文字化 *Verschriftung*」ではなく、英雄伝承の発端となった歴史の根源からは遠ざかった、「現在」に目を向けた個的な作者による「文学化 *Verschriftlichung*」であるとの理解である。そこでは、英雄的素材を取り巻き、それを太古から伝承されてきた情報として示す歴史性は、作品素材とされるそのたびごとに、作品の置かれる現在の文脈に応じてアクチュアル化されるものであり、そこでは口誦の英雄詩が歴史伝承としての機能ではなく、いかにして文学的な歴史伝承として機能し得るか、作品素材の持つそうした歴史性は、この第二段階の文学化のプロセスを通して、いかなるアクチュアリティを与えられていたかが問題となる。

本研究は、ドイツ中世から近世にかけての英雄叙事詩を対象として、素材の段階では本質的に特定の個的な作者とは結びつけられていなかったテキストにおいて書記作品化を経たことにより立ち現われてくる作者性を検証すること、その作者性のもと、英雄伝承の持っていた歴史性がいかなる変容をとげ、結果としてどのような歴史構造に結び付けられたのかを検証することを目的とした。具体的には、ニーベルンゲン複合叙事詩においては、本来の英雄伝承には存在しない内容を持つ、すなわち中世盛期時点での個的な作者による創作である蓋然性の極めて高い『哀歌』が、『ニーベルンゲンの歌』の物語に付されることにより構築される構造を、歴史性

の観点から明らかにすることを旨とした。また、『ディートリヒの逃亡』および『ラヴェンナの戦い』においては、これまでの研究から明らかになっている英雄伝承のローマ帝国史構造への組み込みの際に、中世盛期の「作者」が素材の持つ歴史性をいかに扱ったかを検証した。中世後期に入ると、英雄詩素材を扱う叙事作品は「英雄本 Heldenbuch」としてまとめられ、伝承されるようになる。そうしたもののうち、1480年頃シュトラースブルクで成立したディーポルト・フォン・ハノウエの「英雄本」写本は、ドイツ語圏の英雄たちを4つの血族関係のうちに関連させ、彼らの時代の始まりから終焉までを描く通称「英雄本散文」を収録している。後に印刷された「英雄本」にも収録されたこのテキストには、口伝を通してしか知り得ないエピソードが含まれていることから、15世紀の時点でも口伝の英雄詩の伝承が存在した証拠と見なされている。このテキストの検証を通して中世後期の時点で英雄詩に想定されていた歴史性と虚構性の関係を明らかにし、13世紀から15世紀に至る通時的な英雄叙事詩の歴史性の変移を明らかにすることを目標とした。

3. 研究の方法

本研究に際しては、まず中世盛期ドイツ語圏文芸諸ジャンルにおける作品の作者性のあり方についての比較を行い、作者概念に関する認識についての概観を行った。そのうえで、英雄叙事詩諸作品を対象とし、これまでの研究成果を土台としたうえでそこに見られる歴史構造の分析と、テキストのオーソリティすなわち作者性が帰する先の関連性を検証した。さらに中世後期における英雄詩の持つ歴史性の検証を行うため、前述の「英雄本散文」を対象に、ディーポルト・フォン・ハノウエによる写本版と印刷版の間の比較検討を行い、口誦から写本へ、そして写本から印刷本へとのメディア的基盤の変容が英雄素材の持つ歴史性に関していかなる変容をもたらしたのかという問題に関し、通時的視点からの考察を行った。これらの研究に必要な文献および資料の収集を目的として、数度にわたりドイツ・ミュンヘンのルートヴィヒ・マクシミリアン大学中世学科図書館（2019年以降文学部図書館に統合）およびバイエルン州立図書館、オーストリア・ウィーンのオーストリア国立図書館を訪問した。また、本研究に先立つ若手研究（B）以来の研究交流を継続している現在パーゼル大学助教のC.クローピク女史を2018年度末に招聘して国際コロキウム「Autorschaft und Autorkonzept（作者性と作者コンセプト）」を開催した。

4. 研究成果

(1) 中世文芸における作者概念の概観

中世英雄叙事詩における作者概念を考察するにあたり、まず宮廷叙事詩や歴史叙述といった英雄叙事詩以外の諸ジャンルに見受けられる作者および作者性を検証し、そこには中世盛期以前からのラテン語教養者のテキスト伝承伝統と、俗語による聴衆を前にした口誦的語り手の伝統が交差し、作者および作者性に関して多様な理解と実践が存在していたことを明らかにした。

また、中世に広く受容され、大きな影響力を持っていたセビリヤのイシドールの『語源論』における古典文芸以来の作者概念およびテキストの真実性に関する定義を確認したうえで、それと中世盛期の俗語文芸のテキストに立ち現れる作者の自意識と作者性、そして真実性に関する言説との比較検証を行った。

(2) ニーベルンゲン複合叙事詩に与えられた歴史性

ニーベルンゲン複合叙事詩に関し、『ニーベルンゲンの歌』単独の歴史性『哀歌』の付与により新たに構築される歴史構造の解釈という二つの論点を軸に研究を行った。

『ニーベルンゲンの歌』は、書かれて成立した作品でありながらも、歌唱に適した口誦文芸的な詩節形式やそれに伴う口誦的語りの場の仮構、口誦文芸的定型表現の多用などを通じ、英雄詩の伝統との直接的連関と同質性を演出された作品である。作品が一度成立した後に付け加えられたとされる冒頭詩節では、語り手が「集団的『われわれ』の代表として、皆がすでに知っている事柄を語り謡う」、伝統的な口誦文芸の典型的なそれとして演出されている。さらに、本来の作品冒頭と想定されている第二詩節は、「Ez-wuohs（～が生まれた）」という口誦文芸に特徴的な定型的表现を用い、イン・メディアス・レスに物語を開始する。この物語開始様式は、作品素材である英雄伝承との同質性を強調し、文化的記憶との接合を通して歴史性を纏い、その作者性が個人的な語り手ではなく文化的記憶にあることを示唆している。一方で、この物語は終結部において登場人物たちのほとんどが命を落とすという絶対的な破滅に終わり、「この後に何が起きたか、わたくしはあなた方にははや語ることはできません」との語り手の言葉を通して幕を閉じる。近代以降のドイツ文学研究はこの絶対的破滅の結末を、『ニーベルンゲンの歌』の本質として称揚したが、「過去」が常に現在との関係においてとらえられ、意味を与えられる対象であった中世盛期においては、書かれたテキストとしての歴史性を認められるためには、同時代的に正当性を持つ歴史構造の一部であることが明示される必要があった。しかし絶対的破滅で終わる物語は、歴史神学的モデルとはかみ合わず、帝国遷移構想にも寄与せず、帝国史とも関連がつかない。すなわち、正当性を持つ歴史構造のどれにも適合しない『ニーベルンゲンの歌』は、書かれたテキストとしての歴史性を持ちえない物語であった。

しかし、『ニーベルンゲンの歌』は、常にその後日談であり、また物語で命を落とした者たちへの挽歌であり、なおかつ『ニーベルンゲンの歌』に関する注釈書的機能を持つ『哀歌』と組み合わせられ、写本伝承上の複合体を構築しており、中世を通して滅びに終わる物語としては受容さ

れていない。詩節形式を持つ『ニーベルンゲンの歌』とは対照的に、宮廷叙事詩や年代記文学と共通する二行押韻の詩形で綴られ、またしばしば「書物」おそらくは聖書に言及する『哀歌』では、『ニーベルンゲンの歌』の破滅の先に再生への希望が仄めかされ、「喜び」につながる未来が拓かれる。これにより、物語の終着点は現在にまで連続する時間軸上の過去に置かれ、『ニーベルンゲンの歌』で語られた物語には現在地点もその一部としての意味を持つ神による歴史構造の断片としての意味を与えられることにより、英雄伝承のそれとは異なる歴史が遡行的に生成される。こうして『ニーベルンゲンの歌』の絶対的結末は相対化されるとともに、英雄的世界の滅亡とそのあとの世界の再生という歴史構造が構築される。さらに、この旧世界の滅亡を生き延びた者たちの希望をはらむ未来へとつながる構造は、まさに「滅亡 審判 復活」という黙示録的歴史構造の定型と等しいものとなっている。『哀歌』は、英雄伝承の中の破滅を黙示録的歴史構造の中へと組み込み、英雄伝承に語られ、『ニーベルンゲンの歌』によって文学化をみた滅びの物語のかたちをとる歴史の断片に、救済史のアナロジーとしての意味を与えられていると推測される。

また、前述のように『哀歌』は、そのエピローグにおいてニーベルンゲンに関する英雄伝承がすべて、パッサウの司教ピルグリムによって編纂されたラテン語の記録から発生していることを語っているが、そもそもニーベルンゲン複合叙事詩のパトロンとして目されているのは13世紀初頭にパッサウ司教の座にあったヴォルフガール・フォン・エルラであり、ヴォルフガールは職位上の連続性を通して、ニーベルンゲンに関わる英雄伝承の伝統全体に対して作者性を行使し、それをパッサウの教会史の中に組み込んでいるものと解釈される。

(3) 『ディートリヒの逃亡』および『ラヴェンナの戦い』の帝国史への統合とアクチュアル化

『ディートリヒの逃亡』および『ラヴェンナの戦い』は、5世紀から6世紀にかけてイタリアを制圧した東ゴート族のテオドリック大王を核に持つ英雄、ディートリヒ・フォン・ベルンの逃亡伝説を素材として13世紀後半に成立した歴史的ディートリヒ叙事詩に属し、ニーベルンゲン複合叙事詩と同様写本伝承上の複合体を形成する。ただし、ニーベルンゲン複合叙事詩においては、口誦文芸的な様式を持つ『ニーベルンゲンの歌』に書記文芸的な『哀歌』が続くのに対し、『ディートリヒの逃亡』は書記文芸的な二行押韻形式で綴られ、しばしばその典拠として「書物」に言及するのに対し、それに続く『ラヴェンナの戦い』は口誦的な詩節形式をとる。そして、『ニーベルンゲンの歌』の破滅に終わる物語の後に接続された『哀歌』が、未来の方向へと歴史を生成することで、『ニーベルンゲンの歌』に語られる英雄の物語を受容者にとっての現在地点から遠ざけているのとは対称的に、『ディートリヒの逃亡』の冒頭に置かれた系譜的前史は、本編の主人公ディートリヒから遡って7世代分のローマ皇帝の系譜を叙述し、過去のベクトルへの歴史の伸長を行っており、相対的に『ディートリヒの逃亡』および『ラヴェンナの戦い』に語られる物語を中世的現在へと接近させている。この系譜的前史は、理想的な黄金時代を思わせる皇帝ディートワルトの時代から、徐々に帝国の中に暗雲が立ち込め、最終的に肉親同士が骨肉相食む荒廃したディートリヒの世代に至るといって、下降史観的な歴史構造を示しているが、その中にディートリヒ伝承と緩い間テクスト的つながりを有していた英雄叙事詩『オルトニート』および『ヴォルフディートリヒ』の内容を組み込むのみならず、ディートリヒの6世代前のローマ皇帝ジゲハールの娘ジゲリントが『ニーベルンゲンの歌』の英雄ジークフリートの母であるとするなど、異なる出自を持つドイツ語圏の英雄伝承の登場人物たちを血族関係のうちにおき、ローマ帝国皇帝の系譜を通してつなぎ合わせている。これは、英雄伝承の伝える文化的記憶を、ローマ帝国史構造の中へと展開させる試みであると推測される。

また、『ディートリヒの逃亡』および『ラヴェンナの戦い』は、「誠実」な主人公ディートリヒと、彼の叔父であり「不誠実」なローマ皇帝エルムリヒの対立と、「誠実」であるがゆえに苦境に陥るディートリヒの宿命を基本構造とし、作中のエクスクルスを通した「昔日礼賛」による当世批判が主題の一つとなっているが、こうした主題との関連で注目されるのが、プロローグにおいて語り手が、これから始まる物語を「きわめて耳新しい物語」と呼んでいることである。そもそも英雄伝承における語りとは、これまで語られてきたいにしへの英雄に関する物語を、語り手が自らの聞いたままに語り継ぐという性質のものであり、そこで語られるのは受容者にとって既知の文化的記憶である。それに対し、「新しい物語を語る」との宣言は、英雄詩素材の伝える歴史の断片と現在の「語り」の間に、新たな関係性を構築する意志の表明として解釈され得、ここには英雄詩素材の文学化に際する新たな作者性のあり様を認めることが可能である。

そして、系譜的前史を通していにしへの黄金時代に付託して理想や正しさを冒頭に置いたうえで下降史観的に帝国史を語り、物語内現在の時代を問題をはらんだものとする『ディートリヒの逃亡』は、荒廃した世界の末を『ラヴェンナの戦い』へとつなげる。前述のように『ラヴェンナの戦い』は口誦文芸的な詩節形式とそれによって喚起される、聴衆を前にした語り手により現在進行的に物語が生成される英雄伝承の語りの様式を持つが、そもそも英雄伝承とは、過去の偉大な王や英雄の姿に託して、共同体の規範および理想となるべき行為や倫理を語るという性質を持つ。『ラヴェンナの戦い』は、そうした英雄伝承の語りの様式のもと、「誠実」な、中世人にとっての理想的君主像を体現するがゆえに苦境に陥る英雄として描かれるディートリヒの姿を、中世盛期の受容者にとって価値ある、正当なものとして描き出し、『ディートリヒの逃亡』のエクスクルスで主張される当世批判と呼応させている。『ディートリヒの逃亡』と『ラヴェンナの戦い』の構築する複合叙事詩においては、理想的過去と受容者にとっての現在と重ね合わされる

荒廃した物語内現在とのコントラストの創出を行うことで、ディートリヒを巡る英雄詩素材に語られる君主の理想をアクチュアルな文脈へと移行させ、それにより「新たな物語」を創出するという、英雄伝承の文学化の新たな地平が開かれている。

(4) 「英雄本散文」に見られる中世後期の英雄叙事詩の歴史性

15世紀後半から16世紀後半にかけ、英雄伝承から派生した数々の英雄叙事詩をアンソロジー的に集めた通称「英雄本」が人気を博すようになる。写本として成立したものと印刷本として成立したものがともに存在するこの伝承ジャンルは、わずかな例外を除いて『オルトニート』、『ヴォルフディートリヒ』および冒険的ディートリヒ叙事詩を主な収録対象とするが、これらの「英雄本」のうち「シュトラースブルク英雄写本」および印刷本に、写本版には冒頭に「緒言 Vorred」として、印刷本では巻末に補遺として収録されている散文テキストが存在する。通称「英雄本散文 Heldenbuchprosa」(以下「散文」と呼ばれるこのテキストは、『ディートリヒの逃亡』の系譜的前史にその萌芽がみられた、ディートリヒ・フォン・ベルンを基軸として英雄たちを有機的な連関のうちに置くことが目指されている。時には英雄詩素材の概略、時には単なる英雄の名前の列挙を行う「散文」は、その散文という形式、また英雄たちの系譜や地理に関しての「無味乾燥」な叙述のスタイルから、同時代の修史/歴史編纂を模倣していることが指摘されており、「語られていることが歴史的に真実であることを主張」するテキストとしてみなされている。この背後には、英雄伝承を一定の「歴史」の文脈内に位置付ける意志の存在が明らかであり、そしてプロローグにおいては、この散文が「英雄たちがいかに生まれ、そしていかに姿を消し、またいかに最期を迎えたか」を語ることに主眼とされている。ここから読み取ることができるのは、英雄たちをその登場と退場という枠の中で語るという姿勢である。すなわち、ニーベルンゲン複合叙事詩および『ディートリヒの逃亡』と『ラヴェンナの戦い』にみられた、過去の断片としての英雄詩素材から歴史構造を遡行的に生成し、現在との関係性のうちに置くのではなく、断片を蒐集したうえで連関のうちに置き、それらの「全体」の姿である「英雄たちの時代」を、現在との関連においてではなく、内部で完結している「閉じた」ものとして叙述することを目的としている。ここでは、英雄たちの物語はもはや受容者にとっての現在と結びついた歴史性を持たない。

この閉じた「英雄たちの時代」の構築に関して注目されるのが、その背景に救済史的な枠組みが明らかに意識されていることである。すなわち、神による侏儒、巨人そして英雄の創造は創世記の様相を呈しているのに加え、他の英雄たちがみな死に絶えたのち、ディートリヒの最期に際し侏儒のかける、「私とともに来るのだ、お主の国はこの世界のものではもはやない」との言葉は、ヨハネによる福音書18章36節のピラトに対するイエスのことば「私の国は、この世には属していない」を連想させる。また「死」ではない形でのディートリヒのこの世からの退場は、創世記5章24節およびヘブライ人への手紙11章5節でのエノクについての「信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。」という叙述との関連が指摘されている。

この構造が、「散文」の歴史性とどのようにかわるかについては現在も研究上の論点となっているが、確実なのは全ての英雄たちが死んだ後には、ただ一人生き残ったディートリヒはもはや受容者にとっての現在に属するべき存在ではなく、現実の彼岸に存在している「どこか別の場所」へと移されたという認識を「散文」が示していることである。これにより、ディートリヒにより象徴される英雄たちの時代とそこでの出来事は、受容者にとっての現在との直接的な関連を持ちえない時空へと封印され、「英雄たちの時代」と歴史の絶対的な断絶が示される。

最後の英雄であるディートリヒが時空の彼方へと去ったのちに英雄たちと受容者にとっての現在の結節点として残るのは、わずかに彼らがかつて存在したとされる世界と現在の世界の間の地理的同一性と、英雄たちが現在の貴族の祖先であるとの叙述による王侯貴族との血縁付けのみに過ぎない。「散文」に描かれる英雄たちのこの世界からの退場は、「かつては存在したが、それは総体として完結し閉じている英雄たちの世界は、彼らの最期の一人であるディートリヒの運命とともに、この世の彼岸、歴史構造の外へと置かれた」ことを描きだす。そして受容者にとっての現在を含む歴史構造においては、英雄伝承はかつて有していた、その現在につながる歴史構造を生成する歴史の断片として力を喪失しており、英雄たちの物語は歴史伝承としては機能しない。「英雄本」に収録されている英雄叙事詩には、特定の歴史構造の一部としての歴史性は認められ得ず、それらはむしろフィクションへと接近しているという、中世末期における英雄伝承の立ち位置を、「散文」は象徴的に反映しているものと推測される。

(5) その他の研究成果

当研究と並行して、英雄詩/英雄叙事詩の歴史性が19世紀以降のドイツ語圏文学研究で認識されていたのかという問題に関しての研究を進めており、2016年度日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「人殺しと気狂いたち」の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層にて口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 山本 潤 | 4. 巻 126 |
| 2. 論文標題 オーストリアにおける「ドイツ国民叙事詩」研究 『ニーベルンゲンの歌』の「オーストリア性」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 日本独文学会研究叢書「『人殺しと気狂いたち』の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層」 | 6. 最初と最後の頁 10-26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 山本 潤 | 4. 巻 154 |
| 2. 論文標題 記憶と忘却 『ニーベルンゲンの歌』の伝承において形成される黙示録的構造 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 ドイツ文学 | 6. 最初と最後の頁 18-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.11282/jgg.154.0_18 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 山本 潤 | 4. 巻 513-14 |
| 2. 論文標題 英雄たちの黄昏 『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』に見る英雄性への視線 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 人文学報 | 6. 最初と最後の頁 49-66 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 山本潤 |
| 2. 発表標題 Die Wahrheit des Erzaelten. Zu Formen der Autoritaet in der mittelhochdeutschen Epik |
| 3. 学会等名 Internationales Kolloquium "Autorschaft und Autorkonzept"（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Jun Yamamoto |
| 2. 発表標題 Memory and Oblivion. Apocalyptic Structure Formed in Nibelungen-Book. |
| 3. 学会等名 International Symposium "Creation and Destruction of the World" (招待講演)(国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山本 潤 |
| 2. 発表標題 オーストリアにおける「ドイツ国民叙事詩」研究 『ニーベルンゲンの歌』の「オーストリア性」 |
| 3. 学会等名 2016年度日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「人殺しと気狂いたち」の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山本 潤 |
| 2. 発表標題 「歴史」の断片 ドイツ英雄叙事詩のフラグメント性 |
| 3. 学会等名 2019年度日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「フラグメントの諸相 文化的実践としての」 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 著者名 前田佳一(編) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 法政大学出版局 | 5. 総ページ数 316 |
| 3. 書名 固有名詩学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|